

## トピックス 第16回太極拳祭に参加！

中野完二先生一門による第16回太極拳祭は、3月28日、好天にめぐまれて桜も一気に咲いた隅田公園の台東区リバーサイドスポーツセンター体育館で盛大に開催されました。43教室から約470名が参加して終日太極拳を楽しみました。私の担当教室からは「鶴の会」として瑞江鶴の会、東大島鶴の会、亀戸SP教室から代表12名が参加して楽しく交流いたしました。その一端を写真でご紹介いたします。



## 各教室年度末表彰

平成26年4月から平成27年3月までの1年間の皆勤者、精勤者を以下のとおり表彰いたしました。

**瑞江鶴の会**（江戸川区・東部区民館）【会員数38名。内師範6名、準師範2名など。】

精勤者；百澤恵美子さん、村松圭一さん、渡邊則子さん、

**東大島鶴の会**（江東区・東大島文化センター）【会員数39名。内師範2名、準師範1名。】

皆勤者；網代節子さん、鶴本清恵さん、田中高代さん、

精勤者；島田薫さん、高橋ミサ子さん、松井清貴さん、今井和子さん、

特別賞；梅澤芳雄さん（85歳）、昨年6月入会以降3月末まで皆勤

**亀戸SP教室**（江東区・亀戸スポーツセンター）【会員数50名。内師範3名。】

皆勤者；西野進一郎さん（5年連続皆勤です！）

精勤者；浅川信子さん、鈴木葉月さん、松田早苗さん、藤山喜朝さん

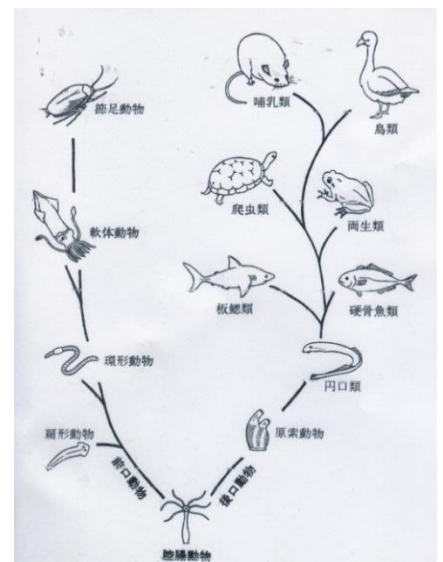
**早朝野外太極拳の会**（江戸川区・清新町内広場）参加者数約20名。

精勤者；高瀬みよ子さん 田巻誠さん、原田光徳さん、

## 閑人閑話 目からうろこ！『昆虫はすごい』

昆虫学者の丸山宗利氏が書いた『昆虫はすごい』（光文社新書・2014年8月刊）を読んだらたいへん面白かったので、その一端をご紹介します。（たいへんよく売れていて、3月段階で11万部を超えたと最近の新聞紙上に出ていました。）

まず本の内容に入る前に動物の進化図（右図）をちょっと見ていただきます。これによるとヒトが脊椎動物の頂点にあるように、昆虫もまた節足動物の頂点にあることがわかります。進化図に沿った言い方をすれば、原始的な腔腸動物から後口類と前口類に分かれ、それぞれ



の進化の道を辿ってきた、いくつかの頂点の一つがヒトであり、また昆虫であるということです。

ですから、“虫けらのような奴だ”などと、人間から見ると取るに足らない、下等な動物のように軽んじて言っているのですが、これは全くの誤解、あるいは人間様の驕りであって、じつは、まったく“昆虫はすごい”ということが、るる紹介されている本です。昆虫は少なくとも100万種類以上あり、個体数も圧倒的に多いのが特徴とされています。

昆虫の生態としての特徴はいくつかあります。例外もあるようですが、まずは「**変態**」です。幼虫から蛹（さなぎ）、そして成虫と、まったく違う姿に変わるのですからすごいですね。それに加えて「**擬態**」と言う特技もあります。他の昆虫に似せる、あるいは植物の葉や枝やときとして石ころや砂にも変装する、あるいは他の昆虫や植物の匂いをまねるなど多種多様な技を持っているということです。

三つ目の特徴は**飛翔**するということです。ヒトはまだ自分では飛べませんが、鳥類は飛べます。昆虫は鳥類に先んじて飛ぶ能力を獲得しているのです。これもすごいでしょ。

第四の特徴は社会生活を営むことです。狩猟、牧畜、街づくり、恋愛、子育て、役割分担、戦争、武器、奴隷、征服と服従、共存共栄(ギブアンドテイク)と、ヒトのやっていることはほとんど昆虫もやっています。とても奇抜な例をいくつかご紹介します。



**栽培農法** 中南米などに多いハキリアリは名前通り、葉を切り取って巣に運ぶところからの命名です。左の画像では葉の代わりに綺麗な花びらを運んでいます。【『昆虫はすごい』に掲載されている写真はモノクロが多くて地味ですので、別途インターネットで検索して探したカラー画像に取り替えました。以下同じ。】

巣に持ち込んだこれらの葉や花びらは菌を植えるいわば苗床として使われるそうですが、巣の中を良好な環境に保持するため共生バクテリアを使ったり、清潔度を維持するために新しいものに取り替えたりもするそうです。こうして繁殖された菌糸が幼虫と成虫の食糧になるわけです。

**おんぶの子育て** コオイムシはカメムシの仲間の水生昆虫で、日本を始めアジアに広く生息しています。



コオイムシのメスはオスの背中に卵を産み付けると、あとは任せたわよ！と言ってどこかへ行ってしまうそうです。(たぶん別のオスを探しにゆくのでしょうか?)後はご覧のように、孵化するまでオスが面倒を見るということだそうです。

なんだか、赤ん坊を負ぶって、“逃げた女房にゃ未練はないが〜”と哀れっぽく歌う中年男の姿を思い起こしましたが、それは関係ないことで、コオイムシにとってはこれが正常な夫婦関係？と言うものなのでしょう。

**殺戮と略奪** 熱帯地方の密林などに多いグンタイアリは、まさに軍隊のように他のアリや他の動物などを襲うことで知られています。亜種にサスライアリという種類もあるくらいで、これらのアリは自分たちでは巣を営まずに、ひたすら一方的に戦争を仕掛けて殺戮と略奪を繰り返します。まるでジンギスカンの軍勢のようですね。種類によって毒針を武器とするもの、大きな牙を武器とするもの、いろいろあるようです。盲目で小さなア





りですが、数万、数十万の集団で襲うのですから、人間とて危険な場合もあるとされています。

**貞操帯** 生物の究極の目的は子孫を残すことですが、昆虫とて例外ではありません。個体の大きさは他の動物群に比べれば非常に小さいですし、強くありません。成虫の寿命もたいへん短いのが特徴です。その代わりにたくさん産むことが種族保存の最大最強手段なのだそうです。オスもメスもよりよき遺伝子を残すために必死です。オスはまず他の雄との競争に勝つこと、そして自分の遺伝子を自分を認めてくれたメスにわたすことです。メスはより良い遺伝子を持つオスを選別して受け入れることです。オスが狙いのメスに認めてもらう手段は多々あるようです。贈り物をする、ダンスをする、はてはカマキリのオスのように自分自身を贈呈して食べてもらう！まで。

しかし、そのあとも心配なのです。ほかのオスとまた仲良くなるのではないかと！。そして考えたのが貞操帯です。ギフチョウなどアゲハチョウのオスは交尾の後メスに貞操帯(交尾栓)をつけて、以降は他のオスと交尾が出来ないような細工をするというのですから、オスの執念たるや恐ろしいものです。

ほかのオスを近づけない方法として、オンブバッタは交尾後もずーとオスがメスの背中におぶさったままで過ごすそうです。よくできたもので、そのためオスはメスよりかなり体が小さいのです。【右画像】



いずれにしても、これも切ないというか、わずらわしいというか、ともあれ昆虫の世界でも、男と女の問題はたいへんですね。

**摂氏100度のおなら** ミイデラゴミムシは甲虫類に属する体長2センチほどの昆虫で、俗に言う“へっぴり虫”の一種です。この虫はお腹にヒドロキノンと過酸化水素という二つの化学物質を貯蔵していて、いざというときに一気に反応させて腹部の先端、つまりお尻から爆発噴出させるのだそうです。その毒ガスの温度はなんと摂氏100度と言います。連射、速射もできるということですからすごいですね。



ところでこの虫の名前は、滋賀県大津市の名刹「三井寺(円城寺)」に伝わる、鳥羽僧正作の絵巻『放屁合戦』に由来しているというのですが、何とも洒落た命名ですね。右はピンセットで押さえるかして、無理やり噴出させた瞬間のミイデラゴミムシのおならの画像です。

まだまだ、面白い話が載っていますが、このへんで『昆虫はすごい』の紹介を終わらせていただきます。

きこうべん

## 左顧右眄 (再開)

【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

### 第8回 名山の美 その2 廬山

廬山は、この連載の第3回【陶淵明】でもご紹介しましたが、揚子江の南岸、江西省にある古くから著名な山です。最高峰の漢陽峰(1426米)はじめ、香炉峰、五老峰などから成る連山で、周の武王の時代にこの山で匡氏七兄弟が登仙して、ただ廬(いおり)だけが残されたところから、廬山あるいは匡廬と命名されたといわれています。李白も詠い、陶淵明も詠っていますが、日本では、なんとといっても白居易(白樂天)(772~846)の詠った『香炉峰下重題』がいちばん有名です。

香炉峰下重題

香炉峰下に重ねて題す

白居易(白樂天)

日高睡足猶慵起  
 小閣重衾不怕寒  
 遺愛寺鐘欹枕聽  
 香炉峰雪撥簾看  
 匡廬便是逃名地  
 司馬仍為送老官  
 心泰身寧是帰処  
 故郷何独在長安

日高く睡り足りて猶起くるに慵うし  
 小閣に衾を重ねて寒さを恐れず  
 遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き  
 香炉峰の雪は簾を撥げて見る  
 匡廬は是れ便ち名を逃るるの地  
 司馬は仍お老いを送るの官たり  
 心泰く身寧きは是れ帰する処  
 故郷何ぞ独り長安に在らんや

二階の部屋で布団に入っているので寒さを感じない  
 匡廬は隠遁して住むによい場所だ  
 閑職の司馬（官命）も老人にはふさわしい  
 平穩で健康ならほかに望むところはない  
 長安だけは故郷ではない、ここでよいのだ

右の写真で、左奥に見えるのが香炉峰、右の双耳峰が双剣峰です。李白が“直下三千尺”と詠んだ名瀑も見えます。



白居易は27歳で進士に合格して詩人としても名を上げました。玄宗皇帝と楊貴妃の悲劇を詠った「長恨歌」はとくに有名ですが、このほかに戦乱や貧富を詠った社会詠の歌も数多く残しています。43歳の時に左遷されて、江州（現；江西省九江市）司馬と言う閑職に落とされましたが、この詩にあるように、小さな草堂を建てて悠々



自適の暮らしを楽しみました。その後、洛陽に戻り75歳の大往生を遂げました。

生涯で約3800もの詩文を作ったそうで、唐代の詩人の中でも一番の多作でしたが、内容も多岐にわたり、また表現が平明であったことから、当時の士大夫階級のみならず市井の人々にもたいへん人気があった詩人とされています。

また、当時の日本でもたいへん知られていた、親しまれていたからこそ、『枕草子』の中の、中宮定子と清少納言【左】の軽妙なやり取りがあったということです。藤原公任（きんとう）が編纂した「和漢朗詠集」の中でも、漢詩については白楽天の135首が最多です。なお、漢詩と日本人とのかかわりについては、またいずれお話ししたいと考えております。

泰山や華山を詠った名詩も多いのですが、割愛させていただいて、次なるテーマに進みたいと思います。

## 旅をうたい拳を詠む

### 箱根にあそぶ

雪残る大観山に踏み立てば大観描きし富士は高々  
 はぐれ雲ゆるゆる行きて山の端に消えゆくを見る箱根の露天湯  
 暮れなずむ湯の街湯本の奥空に茜の雲の二つ三つ浮く  
 須雲川の谷なお暗きその奥に双子山はや朝陽に輝く  
 一夜城城址に立てど小田原城天守は紛れるビルにあわいに

### 北鎌倉に詠う

【写真は東慶寺の楊名時師家ご墓所・3.18 写す】

春の花小さな壺に活けられて床に置かれし禅寺の射場  
 ゆるゆると所作重ねつつおのずから心気満つればひょうと放てり  
 魯迅より贈られしとふ木蓮の花いまも咲く円覚寺の庭  
 紅白の梅咲き競う東慶寺老師の丸き墓石陽に映ゆ  
 大拙はZEN 楊名時は動く禅 とともに眠れる東慶寺墓所

